

博士論文審査および最終試験の結果

審査委員（主査） 西谷 修

学位申請者：村田はるせ

学位請求論文：アフリカで作家であるということーベルナール・ダディエとヴェロニク・タジョーから読む西アフリカのフランス語文学

最終審査：2009年12月5日

[審査結果要旨]

本論文は、フランス語圏西アフリカはコートディヴォワールの二人の作家、B・ダディエとV・タジョーを取り上げ、1916年生まれの男性作家ダディエと、1955年生まれでフランス人の母をもつ女性作家タジョーの二人の作品の読解を軸に、楢岡構造的パースペクティブを作りながら、植民地期から独立期を経て現在に至るまで、この地でフランス語で書く作家たちの営みとその意味を、かれらの遭遇した歴史や社会状況のなかで考究することを目指した論文である。わが国ではほとんど初めてといってよい本格的なアフリカ文学論であるとともに、具体的な主観による経験とその表現である文学作品の読解を通して、アフリカ社会の一面を生きられた経験の内部から照らし出すという意義ももっている。アフリカの言語状況、文学流通の前提となる教育事情、そして歴史社会状況にもよく目配りし、かつ繊細な作品読解に支えられた力作であり、審査員全員一致で博士号を授与するに値するとの結論を得た。

[論文概要]

全331ページ（原稿用紙約1000枚）の本論文は6章からなっている。

第1章では西アフリカでフランス語文学が書かれ始める経緯、現地の言語事情、教育事情のなかで文学が書かれることの意味、植民地体制下および独立後一般的状況と、そこで宗主国言語で書くことのジレンマ、作家たちを取り巻く社会事情などが考察される。

第2章では、ダディエとタジョーという二人の作家を取り上げ、その経歴や作品のテーマ、主題の特徴などを呈示する。とくにかれらが「作家」となる契機に目が向けられ、教育がもたらす社会的疎外（両者に共通）、両者の転機となった体験（前者の投獄、後者の故郷発見とルワンダ事件）、前者においては「書く」ことによる自己形成・自己主張、後者においては自己探求とその不可能をたどり、両者の共通項と懸隔とを示す。

第3章では、ダディエの自伝的作品『グランビエ』とタジョーの代表作『戦いの場、愛の場』を取り上げ、その具体的かつ詳細な読解を通して、40年の時を隔て、かつ性と出自を異にする二人の作家が抱えた課題を検討する。二人の作品の分析を通してコートディヴ

ウォール社会の変遷と、「書く」ことを通じて生きられるそれぞれの時代の状況的課題が照らし出される。

第4章では、独立後のコートディヴォワールの政治社会史に大きな役割を演じた「ポクー伝説」を両者がどう取り扱ったかが検討される。わが子を犠牲にして民を救ったことで女王となったポクーの伝説は、エスニック・アイデンティティの形成に複雑に関与したが、ここではこの伝説浮上の経緯が批判的に検証され、また「構造調整」期以降の「イヴォワリテ」の主張という政治状況との関係が説明される。

第5章では、歴史家やダディエをはじめとする作家たちがこの伝説をどのように扱ってきたのかが順次検討され、それを踏まえてタジョーがこの伝説をめぐって試みた「書き換え」の意味が、文学の可能性との関係で考究される。それは、歴史家の固定によって抹消された語りの潜在的可能性を、多様に展開し書き直すことで、想像力や意識を物語の政治機能への取り込みから解き放つ試みでもあるとされる。

第6章は以上のまとめとして、とりわけダディエとタジョーにおいて見られる「書く」ことが自己意識の形成ないしは探求であり、それが生きられる現実との関係の形成でもあることを総括し、アフリカにおいて「書く」ことの困難（ないし不可能性）と可能性とをあらためて考究した。

[講評]

審査には、本学における論文指導委員でフランス語圏アフリカをフィールドとする地域研究の真島一郎AA研准教授、同じく指導委員でフランス文学専攻の博多かおる准教授のほか、学外から広くフランス語海外文学に通じた立花英裕早稲田大学教授、フランス語圏アフリカ文学の第一人者といえる砂野幸稔熊本県立大学教授のお二人を招き、グローバル・スタディーズの西谷を主査としてあつた。概要は以下のとおり。

アフリカでは、独立といってもヨーロッパ諸国の引いた国境線に従った独立であり、単一の共通言語がない場合が多い。そのため旧宗主国言語——この場合はフランス語——が公用語となり、教育もフランス語で行われるが、一方でフランス語使用は、現地部族の言葉で生活する一般住民と遊離した特定階層を構成することになる。そのような言語環境にあっても、個人意識の形成が「書く」という営みを呼び起こし、文学が生まれる。ただしそれは普通の住民には読まれがたい。では、とりわけエリート（支配階層）であることに自足しない書き手たちにとっては、何を、何のために、誰に向けて書くのか、という問いがつきまとうが、それにもかかわらず文学作品は生み出される。いわば「文学」を育てる条件がないところで、それでも作家たちを「書く」ことに向かわせる動機付けだけはある。それが現代アフリカの多くの地域で「文学」が置かれた状況だが、そこで作家たちは、なにゆえ、いかにして、何のために、「書く」という営みを続けているのか、そこにどんな事情やモチーフがあるのか、そうしたことをフランス語圏西アフリカのコートディヴォワールの作家たちの読解をとおして考究しようとしたのがこの論文である。

論者はこの問いを、西アフリカにおける「文学」登場以来の半世紀を通して考察するた

めに、活動の時代を隔て、性と出自を異にする二人の作家に焦点を当てた。ひとは独立運動や独立後の国家形成の時代を生きた男性作家ダディエであり、もうひとはその後の停滞と社会混乱の時代を生きた女性作家タジョーである。タジョーはフランス人の母親をもつが、植民地下の社会ではありえなかったそのこと自体、すでに時代の変化を示している。ダディエにとって書くことは、彼が身を投じた植民地支配下や独立後の政治的・社会的活動と密接に結びついて、軋轢のなかで自己を定位しつつ表現する、いわば「文学という亡命の地」からの働きかけの試みでもあった。だがタジョーにとっては、初めからアイデンティティの不安があり、欧米への留学の後初めて訪れた自国の農村が出自を確認させ、都市のエリートとしての生活がアイデンティティの浮遊や霧散を経験させるといった、探求や発見、崩壊や模索が「書く」ことを通して続けられる。そしてそのプロセスがまさに、揺れ動き瓦解する社会の諸問題に、作家が身を添わせながら対応する営みになる。国家形成の挫折と混乱の時代を生きたタジョーにとって、「書く」ことはもはやどんな言語を特権化することもなく、したがって国民意識につながるものではなく、むしろ異国のルワンダの虐殺事件を「われわれ」の問題として受け止める、「アフリカ」を広く透視する意識につながってゆく。

こうしたことを明らかにするために論者は、旧フランス植民地の支配状況、とりわけ言語状況と、その形成に大きな役割を果たす教育状況、さらには黒人文学が生まれてくる事情をその分野の先行研究にあたって考究し、また独立後の知識人エリートのあり方やそれを規定した政治・社会状況、あるいは神話的伝承の恣意的な活用によって煽られるナショナル・アイデンティティの意識が分断の悲劇を生むといったコートディヴォワールの現代史、またその問題と根底で結びつくルワンダ事件等についても必要な研究調査を行い、生きることと書くことが切り離せないこの地での作家たちの営みの意味を解明するための十分な背景を描き出している。

そのためこの論文は、文学作品の読解を通じてアフリカ社会（一部ではあるが）を内側から照射するという意義ももっている。この二人の作家の作品解説を軸にした楕円構造の広がりの中に、現代アフリカ文学の主要な局面が時代の変化とそれに連動する視点の違いを通して描き出されるだけでなく、作家の意識形成と不可分の社会の諸相が、それも具体的な主観を通して生きられたものとして浮かび上がることになる。

以上のようなことから本論文は、審査委員全員から高い評価を得て、本格的なアフリカ文学研究にとって創始的意味をもつものとの評言もあった。とりわけ、第4章、第5章で展開された「ポクー伝説」の研究は、アフリカの一部族の伝承が、まずフランスの植民地民俗学者によって採取され、それがダディエを含む独立期の若い作家に「われわれの神話」として取り上げられ、やがて歴史家によってコートディヴォワールのナショナル・ヒストリーのうちに書き直され定着されて、民族創世神話として政治化されてゆく（独裁的大統領ウフェ・ボワニとその後継者ベディエの掲げた「イヴォワリテ」の主張）プロセスを仔細にたどったうえで、内戦の後にタジョーによって複数の物語に書き換えられることで、当初の口承説話ももっていた解釈の多様な潜在性が解き放たれ、それがタジョーの「文学」

の熟成と展開を示していることを、繊細な読解にもとづいて示し、口承説話と歴史の言説、政治的神話、そして文学の可能性のつながりをきわめて濃密に論じており、審査委員から高く評価された。

審査において指摘された問題点は次のようなものである。

－テーマが包括的であるため、立てた課題に十分答えているとはいえ、ヴェロニク・タジョーひとりに焦点を絞ってもよかったのではないか。

－この二人の作家でコートディヴォワールの文学、ましてや広範なアフリカ全域の文学を代表させることはできないのではないか。ただし、これに関しては、むしろ二人の作家を理解するためにも、世界史的に見て「アフリカの」といいうる事情を考慮しなければならないし、また、作家自身が一国的というよりむしろ「アフリカ」への帰属を意識している以上、「アフリカ」というパースペクティブで語るのは不可避だともいえる。

－論中でコートディヴォワールの政治社会状況の記述が依拠しているドゾン&ショヴォーのプランテーション経済論に関する理解に不正確なところがあり、また「ポクー伝説」の政治的効果の両義性や、歴史学者たちの立場についての踏み込みが足りない。

－文学作品のテキスト解釈は繊細でその部分の記述はすぐれたものがあるが、「はじめに」等の記述は改善の余地があり、また全体に繰り返しの部分等の刈り込みができるはず。

以上のような問題点が指摘されたが、いずれも具体的な改善の可能な点であり、本論文の基本的評価を損なうものではない。付言すれば、申請者はかつて海外青年協力隊に参加してニジェールで保母として働き、そこで現地の子供たちに接するなかで童話や文学作品の力に目覚め、帰国後あらためて大学に入り文学を学び始めたという経歴をもつ。以後十年の長い研鑽の成果がこの論文となった。勉学の延長に選ばれたテーマではなく、現実の生活の場で遭遇した経験がモチーフとなり、それに導かれてなされた文学研究だということを見ると、問いが具体的かつ包括的になったことも十分に理由があると考えられ、むしろ研究論文のひとつの範を示しているとさえいえる。

結論として、改善の余地を残しながらも、その達成が賞賛されうる業績であり、申請者に博士号を授与するに値するに十分であることを審査員全員一致で確認した。